

十方七歩と誕生偈 —— 『今昔物語集』 天竺部仏伝をめぐって ——

田 中 典 彦

皆さんこんにちは。過分なご紹介を頂戴致しまして本人が照れくさそうに横に座っている姿を見て頂いたと思いますが、いまご紹介頂いた通り、実に四十二年間にわたって佛教大学にお世話になりました。これもまあ「えにし」といいますか、いろんな先生方あるいは学生さんに支えられて、ここまでなんとか勤めることが出来たのかなあという意味をもって感謝をしているというようなことでございます。最終講義ですよと言われた時に、学生さんに向かって最終講義をするのなら分かるのですが、こんなに沢山の方々、しかも先生方までご臨席頂いて話をするということになると、いささか形もつけねばなるまいと思つたもので、とにかく資料だけは、皆さんのお手元にお配りしておこうと、こういう風に思つた次第でございます。

ご紹介頂いた中にもございましたが、私は、もともとは西洋哲学の勉強をしておりました。ヘーゲルとかですね。大学の時代は従つてドイツ語をしかかれて、そしてつたない語学力でヘーゲル、あるいはそれ以外のドイツ哲学者のものを読んでいたり、そういう学生時代だったんですね。で、そのヘーゲルが、世界哲学史という様な内容の

ことを書いてある所があるんですが、そこにチラチラと分からない言葉が出てくる。その当時の指導教授が「田中君これ、どこのことばかわかるかね」って言うから、私は「分かりません」と。全然分からなかったですね。「これはサンスクリット語と言つてねえ、インドの古い言葉なんだ」とこういうことを私の指導教授がおっしゃったんですね。「そうや君、坊主の息子やつたなあ。ゆくゆく仏教の勉強もしなきゃならん立場になるだろう。だからこの際サンスクリット語を勉強したらどうだ」って言つて、その大学時代の指導教授が勧めて下さったんですね。それで「そうですか。それじゃあ遅まきながら」と大学院からサンスクリットを目指して勉強しようとしたのであります。が、ある大学の大学院の門を叩いたところ、面接でしつかりと落されました。「君サンスクリット、分かるか?」「全く分かりません」。だつて教育大ですから、そんなもの知る訳ないですね。「全く分かりません」。「あ、なら入つて来て頂いても、無理です。従つてどうぞお引き取りを」と、その場で面接で断られました。お断りになった先生の顔は今でも覚えてます。お断り頂いた先生、今でも覚えているんですが、それがまた不思議なことに、佛教大学でお会いすることになるんですね、その先生と。先生は忘れておられました。「先生あの時にこうおっしゃいましたねえ」つて。「そんなこと僕言つたかねえ」。マドロスパイプを啜えながら。これで解つたでしょう。マドロスパイプを啜えながら、おっしゃつた先生がおられます。というところで「もういっぺんサンスクリット語をね、勉強しなおしてから、我が大学の門を叩きなさい」。こういうことになつたんです。でも私も勉強しようと思つていた、そういう気持ちがあつたものですからね、即座にその先生方に伺つたんです。「先生すいません。サンスクリット語を一から勉強するには、どこの大学が有るでしょう」と言つて、「教えて下さい」と。もう聞き直つちやつたんです。すると「佛教大学に行きなさい。佛教大学にうちの大学から停年されて、佛大でサンスクリット語を教えている先生がおられるから。その先生について勉強しなさい」。こうおっしゃつて頂いてね。それ以後、ご

承知の善波 周という先生の所へ来て、習うということになる。こういういきさつです。サンスクリットを勉強しだしたら、今まで少しは読めたはずのドイツ語が、すっかり無くなりました。もう毎日、大学院で初めてサンスクリットをやるって、相当苦労しますよ。それで、そればかり毎日やてるもんですから、ドイツ語が今度は全然解らなくなる。語学ってそんなもんでしょね。使わないとすぐに忘れる。特にある年齢を過ぎた私たちにとってね。入れるのは難しいんですね。頭に入れるのは難しいけど、忘れるのは簡単。一瞬ですね。そんなことの繰り返しの中で、なんとかサンスクリットを少しはね、読めるようになっていったわけですね。それで、本学の大学院の方で学ばせていただいて、昭和四十八年に無事修了しました。修了したとたん助手という身分を頂いて、即座にインド行き命令を受けた訳です。インド行くのも初めてです。そしてご承知の通り英語もそんなに喋れる男ではありません。散々苦労しました。飛行機の中で苦労したんです。「カルカッタへ着いたら空港でインド人が喋るのは英語だろう。こういう風に聞かれたらどう答えるか?」、一生懸命頭の中で日本語から英語を作って、準備したんですよ。ところがですね、そのにわか仕込みの英語なんてのはね、出てこないんですね。いざ係官の前で向こうから、インド式のあの訛ったと言うか、英語かなにか分からないような英語で、パパパと聞かれると、キョトンとしてしまつて何にも答えることが出来ませんでした。すると、横に日本人の方ですが、少し英語を話される方がおつてね、その人が係の人に英語で話しかけたもんですから、その係官が、「ちよつと君、助けてやれ。この君は英語が全く分からん。喋れない」。僕のことですよ。「喋れない。助けてやってくれ」と言う英語は分かつたんです、分かつた。そこで、「ん?、え?」と思つてね、一瞬。何くそと思うじゃないですか。「何をバカな」。ちよつと怒つてみたら、出てきた。英語が出てきたんです。「なんだ英語喋れんじやないか。少しは」。「はい。少しくらい喋れます」。こういうことが起こるんですね。もう緊張でね、最初の経験ですが。

サントイニケータンという所にヴィシュバ・バラティという大学があるんです。これはノーベル賞を受賞したタゴールという、ラビンドラナート・タゴールという人が、創設した大学です。ヴィシュバ・バラティという大学。ヴィシュバ・バラティというのは、世界の人々の巢。巢というのはスズメの巢、鳥の巢、ネストです。世界の人々が集うそういう巢という意味を持ったヴィシュバ・バラティというところですが、その大学に留学させて頂くことになったんですが、色んな人にお会いしました。本当にすばらしい人たちにお会いできたなあと思います。インドから帰って来て佛大に奉職してから、必ずブツダの時間の一時間に学生諸君にお話しすることなんです、それは素晴らしい出会いです。ご承知のマザー・テレサという方にお会い出来たのが、インド滞在中であつたわけですね。そのマザー・テレサさんと、親しくと言うのか、お話させて頂くようになって、それから栄養補給を兼ねて、カルカッタへしよつちゆう出向いたんです。何でかと言うと、サントイニケータンという所は、インドでも一番貧しいといえますかね、食べ物悪い所なんです。暑いわ、食べ物は悪いわっていうんで有名な所なんです、毎日毎日カレー味のジャガイモ食べてる。トルカリーといいますが、ジャガイモを主体にした野菜カレーばかり食べてるんですね。しかもご承知の通り、インドへ行くと生年月日よりも宗教が大事に扱われるんです。宗教。「何年何月何日に生まれた」って、そんなこと書く欄が無いの。書く欄が無いのです。入学のための書類を書く欄には、生年月日を書く欄はありません。だつてインド人は生年月日を知らないからです。最初から知らない。ところがそこに「ダルマ」と書いてある。ダルマ、ダルマと書いてカッコしてレリージョンと書いてある。「あなたの宗教を書きなさい」と言うんですね。それを書くわけです。私もブッディストですから、従つて「ブッディスト」と書いたら、とたんにお触れを回す訳で無いんでしょうけど、皆さんに伝わるんですね。「今度、日本から来た田中という学生はブッディストですよ」と。そうしたらね、とたんに向こうのインドの友達、私に対する態度が全

然違つてくる訳ですね。わたしがおりましたのは学生寮でした。その学生寮では、食堂があつてですね、そこに学生たちが並んで食べるんですね。そしたら、食事係の子供がおります。十二・三歳の子供が食事を配ってくれるんですね。前に皿があつてその上にご飯を盛つて頂いてね、横にバチ、鉢のことバチと言うんです。それにカレーを入れたものを並べてくれる。「今日は一週間に一遍の肉があるなあ」と思つてね。肉、ヤギの肉です。「それがあるなあ」と思つて、楽しみに思つておつた。そしたら、その子供が配つて来てくれて、その肉の入つた鉢を前へこう置こうとした時に、隣の、僕の隣に座つたインドの人、「ノーノーノーノー」つてこう言うんです。「彼は仏教徒だからコレ食べない」。勝手に決めてくれる、勝手に。私は「ちよちよつと待つて」。一週間に一遍しか出ないんですよ、これ。一週間に一遍しか出ない肉。「ええつ」て思つてたんですが、横から「仏教徒やからなつ。田中食べないなあ」つて言われたら、「いいえ」とは言えないじゃないですか、ねえ。それで「はい」つてこう言つたら、さつさと取り上げていつて、その次にその子供に友達がいました。この言葉、一番最初に覚えた言葉です、インド語で。「彼はニラ飯やから」。ニラ飯。ニラ飯つていうのは、ベジタリアンが食べるご飯のことをニラ飯と言うんですね、ニラ飯。まあニラつてことは無いでしょうけどね。それでニラ飯を、「おお日本語と同じか」と思つたんですね、僕。「ああニラの飯か」とね。そう最初思いました。「あつ何の事だろう」と思つて後で聞いたら、「ベジタリアン用の菜食主義者の食事」だつて、これ。さあそれからずつとこれですからねえ。従つてもう一週間に一度出てくる肉も何もあたらな。お魚もあたらな。卵もダメ、全部この隣の人のおかげでございます。この様にお互いに宗教つていうのをちゃんと認めあつて、その代わりにその宗教の中に生きているんだつたら、「食べ物もこうでしょう。行動もこうでしょう。生き方はこうでしょう」つていうことを認め合う代わりに、お互いにそれを制止するつて言つたらおかしいけどね、見張つてくれるというふうになる。これではとつても身体がもち

ません。行つた時六十四キロ。三ヶ月経つたら四十九キロ位まで落ちてましたね。どんどんどんどん落ちていくじゃないですか。そこでちょうどいいチャンスができたんです。マザー・テレサ。「カルカッタへいらつっしやい。カルカッタには中華料理があります。中華料理食べられるからいらつっしやい」。こう言うんで、まあひどい時には一週間に一度カルカッタへ。用事もないのに栄養補給で。そしてテレサさんの所へ訪ねるんですね。ほとんどお会いできませんでした。とつても忙しい方だったので、お会い出来なかつたんですけど。だけど、時々お会いした時には、ビスケットやらいつぱい出して頂いてね。で、色々話をしてくれました。彼女と話をしている間にね、やっぱりえらいなあと思ひましたね。彼女はキリスト教の関係者ですが、インドで生きていくのだから、まずインド人のものの考え方ですね。何を喜び、何を苦しみ、何を悲しむか、ということを理解しなければ、その人たちに「キリスト教がどうだ」というようなことを頭から教えるなんて、これは無意味だ。こういうので、彼女は一生懸命インドの思想を勉強されたのです。丁度マザー・テレサさんの住んでいるマザーズハウスから二キロほど離れていすか、カルカッタ大学というのがございましてね。そのカルカッタ大学にインドの哲学者、インド哲学を教えている有名な、当時有名な先生でしたが、その先生の所へ通つてインドの思想を勉強されたのですね。で、彼女と話をしている時に、インド思想っていうのを、私まだ駆け出しですから。仏教のことは少々、佛教大学で学ばせて頂いたとしても、インド思想なんてそれほど分からなかつたですが、彼女が教えてくれたんです。手ほどきをしてください。「インドの思想つてのはね、生きる力になるように教えてるのよ」っていうのが彼女の第一声でした。「生きてある私ということと関わりを持つ、そこからほとんどの学問が導かれていふということを知つておいた方がいいよ」と、こう言われたんですね。「それは何ですか」と聞くと、「インド人はかなり古い時代から伝統的に、この世の中をもしあなたが幸せに生きようとするなら、三つの目的を持つて生きることです、と言います」と。これはト

ウリバルガって呼ばれているんですが、三つの人生の目標、目的の様なものが、伝統的に伝えられてるんですね。トウリバルガを日本語で言うたらどうなるでしょうね。三つの特性ぐらいでしようか。この世の中を幸せに生きるために必ず人間が求めて成就しなければならぬこと、これが三つある。その三つ。一つは、「アルタ」と呼ばれる。アルタですね。生活の糧と訳されますが、新宿の話とは違うんですよ。「アルタ」この言葉で表わされる。これ、ちよつと漢訳は良くないかなあと思いますが、漢訳は財産の「財」と書く。元を正せば、生きていくための最低限の糧ということ。これを求めることです。それから二つ目が「カーマ」ですね、「カーマ」。これは「愛」です。男女の愛を含めて、全てのものに対する愛ですね。これを成就していくこと、求めていくこと。これが二つ目のこの世の中を良かったなあと言つて、幸せに生きていくための二つ目の目指すべき、成就すべきこと。そして三つ目に「ダルマ」という言葉が出てくるんですよ。「ダルマ」。ダルマは先ほどいいましたように、現在のインドでは宗教ということを意味しています。今インド人にダルマという言葉を使うと、宗教という意味になりますが、この場合のダルマ、これは生きる道ですね。我々の生きていく、人間として生きていくものが、基本的に従つていくべき真実つていいですかね。そういうことになろうかと思ひます。「この三つを成就する。これが人間の生き方なんです」。こういうように教えられたんですね。

例えば、このアルタ、財ですね。繰り返しますよ。財ですが、元々は生きるための糧。自分が生きていくという状態を保つていくための糧ということですが、これを非常に詳しく研究されていったのが、『アルタシャーストラ』という、そういう文献まで出来あがつてくることになるのですね。それが現在では、経済学、政治学、こういうものはそのアルタのラインの中の延長として、学問分野としての経済学・政治学のようなものに発展していくというように拡大されていっています。次のカーマは先ほどいいました。愛ですが、それをもつと平たく言うと、恐ら

く精神的な心の充足感ですね。心の喜びであり、心の充足感という意味を持っていると解釈されたカーマが、後に音楽・芸術学・芸能といった、そういうダンスだとか、そういうな方面へ拡大されていつている。そして三つ目のダルマ。これは、生きる道でございますから、その中に私たちの持っている言葉でいいますと、哲学・倫理学ですね。哲学・倫理学等がその中、ダルマと呼ばれる中に納められていく訳ですね。その最たるものが、宗教ということになるんですね。そういうわけで、元々はダルマというのは、法律的な意味を持って人間はこう生きるべきですよという、こういう定めを含んだ人間の生き方を説き示したものでありますが、それがこのように、後に哲学・倫理学・心理学という方向へと転換されていつている。従って「インドのありとあらゆる学問についていうのは、生きるというところから、生きていく為に求めるべきものという形でたてられてきたものですよ」と、こういうことを、マザー・テレサに教えてもらったんですね。後で色々調べてみると、少しは違った部分もあるんですけど、そういう昔の伝統的なものを、現代的な形で彼女は理解しようとしていたということがよく解りました。まあとっても素晴らしいお婆ちゃんで、綺麗な英語をお話になったお婆ちゃんでありました。人と人との縁についてのか、関わりというものは、ホントに色んなことを与えてくれるんだなあと思いましたね。

それから、もう一つ面白い出会いというのは、恐らくこんなこと言っていると六時間ほど話すことになりましたが、バウルという遊行詩人でしょうね、遊行詩人。現代のヒンドゥー教の一派に歌う宗教つてのがあってね、即興詩人です。バウルといえます。バウル。以前、レコード、つてもう古いですか。レコードでバウルソングつてのが出ていた。今でも恐らくDVDでも出てるんじゃないかと思いますが、バウルソングというのがあって、宗教的な意味を含んだ歌を歌いながらですね、各地を回るといって、そういう遊行詩人というのがあるんですね。この人にお願いですと、即座に、即興ですから、あなたにふさわしい歌をその場で作ってくれて、歌ってくれるわけですね。だか

らこれをお願いしたんです。家へ回って来ますから。ちょうど私の下宿へ来られたので、三人来られましたけど、「すいません。あのお願ひします。ついては佛教大学という所へ送って学生諸君に聞いて頂きたいと思うので」と。あの当時はテープです。「テープに録らせて下さい」と言うのと、「ノー」と、こう言われました。「これは宗教的な意味を含んだ聖なる歌だから、録ってはいけません」と言つて、断られた。それなら、この田中君、インドに行つて五・六カ月経つていたものですから、インド人のやりかたは分かっているものですから、ポケットに手を入れましてね、いささかのものをそつと下からお渡ししたら、とたんに「イエス」つて言うんですね。「イエス」。すぐに変わつてくれるんですね。「イエス」。インド人の特色「イエス・ノープロブレム」つて必ずいいますからね。もう問題無いという。問題だらけだけど「問題無い」つて言うのがインド人の特色でもあるんです。「ノープロブレム」。こう言つてね。で録らせてもらった。歌う前に「ちよつと待つて、君どこから来たか?」、「は、日本からです」、「何を仕事にしますか?」、「大学の方へお勤めしようと思つています」というようなことで、色々話を聞かれ、そして五・六分経つたら、歌つてくれるんですけど、さあ、それをテープに録つても全く分からなかった。だつてベンガル語ですから。ベンガル語で歌つてくれるから全く分からん。そこで、それをちよつとオックスフォードから帰つてきた学生がおつてね、インド人の。「申し訳ないけどこれ、英語にして」。英語に直して頂いて、英語に直したものを日本語にしてみようとしたら、何を書いているのかさっぱり分からんかったんだけど、「目の玉ひっくり返せ」と書いてあつた。「目の玉ひっくり返せ。日本人でしょ。あなたの目はね、生まれてこのかたずっと外向いて付いてるでしょ。中向いて付いてる人いらつしやいますか。ね。外向いて付いてるでしょ。だからね。人のことはよう見てる。その目では自分が見えない」ということを歌つてあるんですね。ここで歌いませぬよ。また欲しかったら言つてください。歌詞だけは日本語で差し上げますからね。目の玉ひっくり返せということ

を歌つてある。「ね。時には、目をひっくり返す必要がありますよ」つて言われて。ちようど少し仏教を知っている人がそこにおいて、「ブツダの目を見てごらんさい」と、こう言われた。「何ですか?」。「半眼でしょ。半眼」。ブツダはね、目をパチツと開いているのは割と少ないんです。スウーッと薄目を開けておられるのですが、「半眼、あれ何のためか解つてんの?」。インド人に説教されたんですね。「半分外見て、半分内を見よ」ということらしいんですが、そういうことも教えて頂いてね、なるほど、というように思いました。私と一緒に勉強させて頂いた先生方もここにいらつしやるんですけど、意外と私、学生時代はマジメやっただよ、ね?マジメで割に堅い方のタイプやっただよですが、インドへ行つてコロツと変わりました。三つのことを求めよ。その求める基本には「エイシャナー」。エイシャナーというのは、何と言うのか、求めていくことです。欲求という意味なんです。良い意味で使うときの方が多くですけど。「エイシャナー」。その三つのエイシャナーを持って生きていくんだ」と、こう言われたときにね、「あつそうか」と。田中君なりに「じゃあ自分で嬉しい事、楽しい事、これを求めていけばいいんだなあ」というように自分の中で理解しましたねえ。

この佛教大学は皆さんもご存じでないでしょう。昭和五〇年代はサンスクリット語が必修やっただよ。一年生に必修。全員サンスクリットを教えるという、まあものすごく、世界的に見ても稀な大学だっただよ。それで、京都大学から来られた、梶山雄一という先生がおられたでしょう。有名なね。あの先生が「田中君、この大
学サンスクリット必修やつてね」。「そうです」。「おお、インターナショナル・レアケースだ」つて言つておられた
ほどですからね。サンスクリット語一年生は全員受けなきゃならん。インドから帰つてきて一年目に持つたのが一
三九名位の学生さん。いきなり教えさせて頂いた。単位を取つたのが三十七名だっただよ。通つた学生、小躍り
して喜んでましたねえ。その代わり私は苦勞しましたね。えー忘れましたが、当時の教務課の偉い部長の人だつた

んでしよう。「ちょっと教務課へ出頭しなさい」と。行つたんです。「先生、一三九人受けてて、通るの三十七人てどういうことですか。こんなことしたらダメです。もつと通しなさい」。もつと通しなさいつて言われたつて、語学の試験つてのは、キチツと出るじゃないですか、点数が。特にサンスクリット語なんて、一つ一つの文法事項を追つていたら一点ずつでもね、キチツと出てくるもんですから仕方ないじゃないですか。それで開き直りました。「分かった」。答案用紙みな持つてその人の所へ行つて、「点数付けて」つて言った。「点数付けてください」と。その時はそれで言われたことが分かりました。二年生になつても取らなきやならない学生がおる。必修だから。「先生二年生もやりますねえ」つて言われるから、しょうがないじゃないですか。明るる年から週に二回サンスクリット語をね、落つちちた方と、新入生の両方に教えるという、こういうことをしてた訳ですね。そこからいくと最近ではサンスクリット語を少し勉強する人が少なくなつてきました。とにかく、話せば長くなりますので、こんなことだけで終わつちやいますからね。楽しい事、楽しい事を求めていこうという。こういうことになりました。

さて、私は、実は昨年からは仏教学科に戻つて来たのですが、その前ですね、その前に三年間有り難いことに日本文学科に籍を置いていたことがございます。籍を置けば、置いたところでやっぱり自分の喜びくらいは持たなきゃならん、と考えて、ふと目についたのが、この『今昔物語』ということ。まあハツキリ言う、こういつた仏教に関わりのある文学でしか自分には扱えないということも一点ですが。日文の方にシフトした限り、私の授業は日本文学をお教えることになるので、とにかく一生懸命やってみようと。そこで嬉しいことに見つかったのが、『今昔物語』ですね。ご承知の通り、中世、日本の中世の文学つていうのは、極端に申し上げますと、仏教理解が無ければ味わえないというのか、読み切れない文学なんですね。恐らくこれは拡大すると近世の文学にまで及んで

いくだろうと思いますが、フルに仏教というのを理解していなければ、読み切れないところが出てくるわけですね。ということ、『今昔物語』をひも解いてみたのですが、資料に書かれている通りです。『今昔物語集』は三部に分かれておりますが、一部は天竺部と呼ばれるインド篇なんです。それから二部が震旦。つまり中国とか、西域の方のお話があつて、三部に本朝部というのがあつて、日本の伝承物語がまとめられている。こういう書物であります。『今昔物語集』の冒頭、いきなりその天竺部を開いてみると、そこに書かれているのは、なんとブツダの、お釈迦様の伝記なんです。これは大学院の時代にも詳しく読んだこと無かった。『今昔物語』は知っていましたよ。だけど、一般的には『今昔物語』の中の何か面白い所を取り出して来ているのが、高等学校の教科書であつたりするものですから、全体を読むっていうようなことはあり得なかつたわけです。そこで『今昔物語』を開いてみて、色々とい教的なことを感じながら読んでみたのです。すると面白いことが二つほど見つかったということです。そこだけを取り上げました。ここに至るには当然、各資料をかなり細かく扱つて、一覧表を作つたりして吟味はしたわけですが、まずご覧頂きましょうか、せっかく資料をお配りしてあるものですから。一ページ目ですが、取り上げようと思うのは「十方七歩」と「誕生偈」という、この二つだけまずクローズアップしてみたいですね。『今昔物語集』というのは、これまで当然、国文学者によつて、あるいは仏教文学を研究された先生方によつて、随分と研究されて来ているわけでありませう。その天竺部の資料ですが、これまでの研究。学者、先生方の見解からとらえますと、十巻本の『釈迦譜』というのが、かなり影響を与えていると思われませう。この『釈迦譜』というのは、釈迦の伝記的な意味を持っているということ、これはご理解頂けると思ひます。この『釈迦譜』の十巻本の内容は、実は『過去現在因果経』四巻が、そのまま引用、というよりは、もう挿入されているわけです。引用じゃなくて挿入と言つた方がいいわけです。そのまま取り込まれているようなかたちです。従つて、お経ということを源泉とし

て見なししていこうとすれば、『過去現在因果経』というのが、かなりの影響を、内容的に吟味すれば与えているということになると思います。それに色々なものを『今昔物語』が用いているということが分かるわけでありまして。資料の三ページの冒頭、二行目からですが、「未だ推察の域を出るものではないですが、『今昔』はこれらに話の大枠の構想を得ながら、『釈迦譜』を通して、『過去現在因果経』を源泉資料としながら、しかも横に『法苑珠林』、これは辞書の様なものですが、『法苑珠林』を辞書的なものとして参照し、編者の興味に基づいて種々の資料をも取り入れながら創られたものであろうと理解できると思われます」。このように書いておきました。従ってたくさん資料から『今昔』を編んでいったということがわかります。編んでいくためには、これはかなりの努力が必要ですね。こつちとあつち、こつちとあつちと、ただ単に集めただけでは話の流れを創ることが出来ないわけですから、従ってそこに編者または、著者ですね、意図が加えられてくるのは当然だろうと思います。

その中でさつそく面白い所だけを取り上げてみたいと思います。「十方七歩」をご覧ください。資料三ページの八行目です。「二、十方七歩」。巻一の「釈迦如来、人界に生まれ給う事、第二」という所において、前半部分は『釈迦譜』十巻本、従って内容的にほとんど一致する『過去現在因果経』巻四に依っていることがわかります。しかし、ここで一転して『今昔物語』は、他の資料を手に行っているんですね。ちょっとそこを読んでみますと、「夫人、蘭ニ至リ給テ、宝ノ車ヨリ下リテ先ズ種々ノ目出タキ瓔珞ヲ以テ身ヲ飾リ給テ」、こうあるんですが、次の「其ノ樹ノ様ハ」、一本の樹があるんですが、木の所へお出かけになるんです。「其ノ樹ノ様ハ上ヨリ下マデ等シクシテ、葉シダリテ枝ニ垂レ敷ケリ。半ハ緑」云々と、こうなっていますが、実はこの箇所は『過去現在因果経』には全くみられない記述でありまして、それがどこにあるかという点、実は『仏本行集経』という、別の流れの違った仏伝のみに見られるのです。こういったことを少し注目してとらえてみたのですが、さて、いまここに問題に

しますのは、資料に「太子已二生レ給ヒヌレバ、天人手ヲ係ケ奉テ」とありますが、この文章には該当がありません。全ての資料は一人です。単独で歩いたことになっているのです。二人の者が手を添えるという、その表現は無いのですね。これは全く日本的な発想かも知れません。

さて、問題の箇所に入ります。この後お生まれになられたこの釈迦、その時は太子ですが、子供さんが、ご承知の通り「四方ニ各七歩ヲ行ゼサセ奉ル」、そう書いてある。これは「天人手ヲ係ケ給テ奉テ四方ニ各七歩ヲ行ゼサセ奉ル」と続いているわけですね。このように四方に七歩歩いたという表現があるのですが、『今昔物語』が次にこういう風に書いている。「南ニ七歩行テハ、無量ノ衆生ノ為ニ上福田ト成ル事ヲ示シ」、そして次に「西ニ」、次に「北ニ」、そしてその次に「東ニ」です。これで四方です。東西南北ですから四方です。ところがその後を見て頂きますと、「東ニ七歩行ジテハ」の次です。「四ノ維ニ七歩行テハ」と出てまいります。「四ノ維」というのは、これは東南とか西南とかいう、東と北と間の東北とかいうこの四つの隅という表現です。従ってそれを合わせると八つです。さらにその次の行を見て頂きますと、「上ニ七歩行テハ」と、どう歩くのか分かりませんが、とにかく上にお歩きになるんですが、これはよくまだ文学的に分かるのです。一歩歩くたびに下から蓮の花がハッと現れて支えたと書いてありますから、階段の様にお歩きになることは分かるんです。もう一つ分からないのは今度、下に歩くんです。「下ニ七歩行テハ」。今度下に歩くのは理解が難しいですね。どう歩くのからちよつと見当つかないですが、どうですか。東西南北そして四隅と上下です。合わせて十になります。十方です。従って『今昔物語』はここに四方におのおの七歩歩かれたんだと、そのように書きながら、続いて四維、上下というようにして、十方各七歩をここに取り込んであるということが分かります。このことはどうして起り得たのだろうか。「四方」、われわれ仏教の方では、実は「十方」と書いて「しほう」と読むのです。「しふほう」なんですけど、「ふ」が小さい「しふほ

う」ですから、聞くと「しほう」になります。従って、結論的にそこをいいますと、この編者はですね、『今昔物語』の編者は、初めから「十方」ということをここで言おうとしたのかな、と。それを語った時に「しほう」と発音したために、書き取った人が「四方」というように書いたんじゃないのか、というように理解できるのではないか。こういうことを考えついたわけです。そして、そうならば、その他に同様のことが起こるという可能性を追求しなければなりません。資料には挙げていませんが、別の所でこういう事が起こります。インドでは、今でもそうなんです、人が亡くなられたら、粗末な竹と縄でベッドを造って、その上に白い布を乗せてそこに安置される。上からまた白い布をかけて、綺麗な、お参りに来た人が、みな花の頭だけ、軸は無いのです。その花の頭だけを持って来て綺麗に飾り、絵を描いてくれる。そしてお顔に化粧をして頂いて、これをですね、家族ではない、関わり深い友人等が、四人で輿を担ぐんです。そして亡くなった彼が生前中に活躍された所を回ってあげるんですね。これを『過去現在因果経』は、「四人、輿を担ぎて」と書いてあります。これを『今昔』は、「亡くなった人」に変えてあります。「四人、輿を担ぎて」というのを「死人を輿で担いで」としてあるんですね。こんな例が割と数多く見られます。従って、語りの中で語った人と、それをその速記した人の間で起こる、言わば誤りだと思えます。もともと「十方」ということをここで言おうとしたんだ、と私はそういう風に考えたのです。

ところで、編者はなぜ「十方七歩」と言う事をここで用いようとしたのかというと、『法苑珠林』に「十方七歩」ということが、ちゃんと辞書的に出てくる。しかもそれがどこに出てくるのかというのと、資料の四ページを見て下さい。『大般涅槃経』という經典にあると『法苑珠林』が記しています。恐らくは、十方という事を書くようとして、そして、十方がどこにあるかという事を『法苑珠林』で辞書的に調べたくなって、ここへ持って来たんだと思います。資料の四ページの七行目、『大般涅槃経』の当該文は以下のとおりである。以下の当該文を読んで頂いたら分

かります。「南に七歩行きて、無量の衆生の上福田とならんと欲することを示現する」と。ならんと欲する、それを示現するとあります。これを『今昔物語』の南と合わせて見て下さい。先ほどの三ページ、「南二七步行テハ、無量ノ衆生ノ為ニ上福田ト成ル事ヲ示シ」。「示現し」というのが、「示シ」になっておりますが、内容的にほとんど一致することが見てとれます。そのようにとって頂いたら、以下「西二七步行テハ」云々ですが、後に合わせてみたいと思いますが、そういう風に内容がほとんど、一〇〇パーセント同じというわけではありませんが、内容的にはピタツとこの十方を持ちこんでいるということが見てとれると思います。どうぞ後で確認してください。一部違う所もありますが。そういうふうに「十方」を言おうとしたんだと。それを「四方」というように誤って書かれたのか、書写する人がそうしたんだらうと。けれども十方を持ち込んだ事が、後の所まで実は一貫されているという事をお示ししておきたいと思えます。

それでは次のところへ、次の五ページをご覧下さい。「獅子句」と書いておきましたが、「誕生偈」であります。皆さんもご承知でしょう。佛敎大学では、降誕会といって四月に甘茶の儀式をするからご存知だと思います。七歩歩いた後で、我々が知っているのは、一般的に知られているのは「天上天下唯我独尊」と言ったことなんです。ね。「天上天下唯我独尊」。右手を高く天を指して、左手を深く地を指して、「天上天下唯我独尊」と宣言なさったんだという事は、一般的になっております。ところがご承知の方もおられるでしょうけど、この「天上天下唯我独尊」というのは、使用率は割に少ないですね。資料に挙げておきましたので見て頂いたら結構です。「為尊」ってのが多いんですね。「為尊」「我れ尊しとする」というね。その方が実は使用例が多くて、我々が知っている「唯我独尊」というのは使用例は少ない方です。ところが、一般的に我々はその「天上天下唯我独尊」というのが伝えられて来てるわけですね。ところが『今昔物語』は極めて特異な偈を出しているのです。それが「我生胎分盡

是最末後身 我已得漏盡 当後度衆生」という。こういう偈をここに出しているわけですね。これはどうしたことかというわけで、私もこれは知らなかったものでビックリしたんですね。何せこういう文献を細かく突き詰めて読んでいくことを、そんなにしたことがなかった私ですから、エエッと。なぜ「天上天下唯我独尊」じゃなくて、「我生胎分盡」を用いたのだろう。いったいこれはどこにあるのだろうと思って、それを探ってみたわけです。すると『今昔物語』の「我生胎分盡 是最末後身 我已得漏盡 当後度衆生」に最も近いものは、『大智度論』その他にみられることが分かりました。それらと比較しますと、すなわち『大智度論』とは何が違うのかというところ、三句目ですね。「我已得解脱」になっているんです。『今昔物語』は「漏盡」としていますが、ここが「解脱」になっております。そして、その下は「当復」なんです。『今昔物語』は「当後」のちという漢字を使っていますが、『大智度論』は「当復度衆生」なんです。これでまた迷いました。そこで、京都大学に実は写本があるのです。とうとう京都大学へ行つて、これは何かの間違いだろうと思つたものですから、本当にその通り校訂されているのかどうかと思つて、見せてもらいに行つたんですね。で、それで分かつたことは、「漏盡」、これは「解脱」になっていることは間違いようありませんが、これはそのまま、やはり「漏盡」でした。ところが下の「後」と「復」っていうのは、くずし字にされていますとほとんど同じ形なんです。点があるか無いかわくらのこと、しかも古い写本ですから、その点がすねハッキリとは読みとれない。それがあつたかなあという可能性だけです。ひよつとしたら「後」と「復」はその写本から校訂するときの間違いも有り得るかとおもいますが、どうしても「漏盡」と「解脱」は間違い様はございませんね。そういうことがわかるわけです。これも問題にはなりませんね。当然。小さいことであるけれども間違い。その間違いは問題になります。

そこで、まず今『大智度論』です。これと同様の偈は、吉蔵の『法華義疏』に出てまいります。ここには、「故

釋論云」と書いてあって、そして以下の如く伝えられています。「我生胎分盡 是最末後身 我以得解脫」です。「當復度衆生」、これは『大智度論』と全く同じです。従って「釋論」というのは『大智度論』を示しているものであろうかというように思われます。しかし「我已得解脫」は「我以得解脫」。「以て」という字を使っているんですよ。「以て」という字は、恐らくはこの「已に」ということの誤りなのであろうというように、私は一端ここで判断したんです。ところが後でですね、これが大きな問題になったんです。これを「すでに」と読んでしまうと過去になりますね。ところが「もつて」というように読むことによって、過去ではなくなる可能性がありますね。「我已得解脫」と読んでしまったら、「已に」ということを意識するとこれは過去になる。つまり生まれた瞬間から、僕はもう解脫を得たということを宣言したことになってしまいます。ところが、「以て」という事にすれば、ちょっと違った意味にとられてくる可能性がある。ところが「以て」と言うと、今度は漢文的に非常に読みにくいということにもなるわけですね。「我以得解脫」ですから、「解脫を得たことをもつて」というようになって、次の文章とつながりをもつていってしまうのかなという解釈、読み方にもなってしまうわけです。これも一つ迷いがあるのですが、ここでは恐らく「すでに」という字が良いという様にその書写されたのかなとします。その次に『涅槃經遊意』ですね。『涅槃經遊意』では、「既自得解脫」となっております。そこにまず違いがある。ここでは「既自得解脫」とされていることが分かります。さらに基の『妙法蓮華經玄贊』は、「我已得漏盡」、これは先ほどの『大智度論』と同じものになっています。「經中に」と書いてありますが、「經中に説かれている如し」ですから、当然『妙法蓮華經』を示しているものと考えられますが、今のところ該当箇所は断定できておりません。ここにあたる『妙法蓮華經』の中に私は該当箇所を見出していないのです。努力が足りないということでしょうか。そして同じく『阿弥陀經通贊疏』にも「論に説かれている」として、同様の句を記述しております。

こういうように少しずつ違いはありますが、よく似た偈が使われていることが分かります。しかし『今昔物語』に用いている偈とは、全同ではありません。これらとの「解脱」と「漏盡」、「復」と「後」の相違があるということは、認めておかなければなりません。「復」と「後」の相違はあるいは書写間における誤写でも有り得る可能性を含みますが、決定はできません。くずし字そのものがほとんど薄くて読み切れないようなものですから、これはその筋のご専門の先生にお伺いしなきゃならないというようになります。このように問題はたくさん残ります。

それでは次に、今までのことをまとめている所ですからゆつくりとお読みしたいと思います。「結びにかえて・十方七歩と獅子句（誕生偈）」。

ここまで『今昔物語集』巻一の二「釈迦如来、人界生給語第二」にこだわって考察を進めてまいりました。それは少なくともこの物語の天竺部に記される仏伝の中で重要な意味を持つているものと理解するからであります。何せ物語の冒頭部分ですから。そして『今昔』は人としての釈迦の伝記を指そうとしています。しかし資料として用い得るものには殆ど兜率天の菩薩が描かれていました。兜率天というのは、この世の中にお生まれになる前に、すでに兜率天という世界に菩薩としておられたわけですね。そのことを書いてあるわけですね。そういうことが書かれてあるんですが、『今昔物語』はいとも簡単にまとめて終わりにしているわけですね。また我が国の仏教も同様の仏陀観であった。そこで「釈迦如来、未ダ仏二不成給ザリケル時ハ釈迦菩薩ト申シテ、兜率天ノ内院ト云所ニゾ住給ケル」というこの一文で『今昔物語』はそれまでのものを収めているわけですね。そして、そこからすぐにこの「人としての釈迦」の方を中心に置こうとしています。すぐに「当下作仏」から、つまり具体的に言うところの地球という星にお下りになる。つまり人の世界に下ってくる、これ下るんですが、「まさに下って仏と成るべし」

というわけですね。「当下作仏」からこの物語を始めているのです。内容的にはまずおそらく「当下作人」といつてよいだろうと思われれます。なぜなら兜率天におられる時に、人間界に下るといふ決意をされるからです。人間界に下ろうといふ決意をされて、下つて来られる訳ですから、従つて「当下作仏」の前は「当下作人」といつてよいだろう。「閻浮提」二下生シナムト思シケル」といふように『今昔物語』は表現しているわけですね。閻浮提、人間世界、人間世界に下生、下つて生まれる、生まれていこうといふようにお思いになられた、意志を決定される、といふように表現されています。それが菩薩自身の決断であつたこととなります。そこには大乘の菩薩觀が示されているのですが、これは別の問題にさせていただきます。「五衰」というのが出てます。これはその前の流れを書いていないもので、ちよつと分かりにくいですが、兜率天で天子であつたお方が、人間界に下るんだと心を決めた瞬間に天子の相が無くなるんです。天子だけが持つているお姿、例えば、天子は汗をかかないそうです。ところが人間界に下つてくると汗をかくだそうです。それから天子は瞬きをしないそうです。だけど人間界に下るんだというように思しける、その時に天子であつた彼の目がこう瞬くようになつちやつたつて、こういうように五衰、五つの衰えと書いています。天子の相が衰えていくといふ表現になっています。この五衰は人間の持つ相に近づくことを示しています。従つて瞬きはする、汗はかくですね。そういう人間の姿に近づくことをも意味しています。そしてまた父母を決めて入胎します。そして誕生する。まさに人としての菩薩の伝記の始まりがここにあるわけです。『今昔』の最大の関心事は人界で、人としてどのような在り方、あるいは生き方をするか。そしてどのように成道を得て仏となつていくかといふことに置かれていふようであります。それを内容づけるには、単に四方を七歩行じた、歩いたとするよりは、この世での菩薩の行いを十分に示しながら、しかもこの物語の内容の今後の進展、この物語のすーつと進んでいく仏伝の進展ですね。その進展を方向づけられるように伝説をここに用いようとしたので

わゆるこの「誕生偈」はその前の七歩と意味的に通じあいながら、通じながらその中身を現しうるものである。しかもそれを人界における誓願あるいは宣言として理解しようとしていると考えられます。生まれた子供は「これからこうするんだ」、「こう生きていくんだ」、「私はこうしますよ」、というね。宣言的な、より「誕生偈」にふさわしい内容として、それを理解していつてると思われます。「我生胎分盡」これの読み方は難しいですが、漢文的にどう読むんでしょうかね。私はこう読みました。「我が胎に生ずる分尽く」と読まざるを得ないと思いました。「我が胎に生ずる分尽く」ね。漢文的に間違いがあるかもしれませんが、他の人の読み方でいくとちよつと違ってますので、これは輪廻の世界にあつて種々の生を繰り返す、つまり次から次へと胎を変えることによつて、生まれ変わつてくることの、そういうあり方がもう尽きた、これで最後だよという意味ですね。これが最後の胎から生まれてくるといふ、輪廻を繰り返してくるあり方の最後だよと、これが尽きたという、それが受けられての「最末後身」でしたがつて、これが私の最最後の身体をもつた登場である。私が人界に現れたこの身体が最後のものですよ、と。その次ですね、「我已得漏盡」。そのまま読みますと、我すでに漏盡を得たり。ということになります。直訳すると、「私はすでに」漏、漏は煩惱のことですから、「私はすでに漏、煩惱を尽くすことを得た」というようになります。すると先ほどいいましたように、生まれた人がその場で私はもう漏を尽くしたことに、漏を尽くしたことが解脱であるということですが、ちよつとこの『誕生偈』のところに持ち込むにはなんか不自然な感じがしますね。生まれた赤ちゃんが、「もう私は解脱を得たんですよ」と、生まれたその時に解脱を得たことになります。その次の仏伝によつて何を伝えようか。つまり悟りに至る道なんていうものを示すということ、非常に何か違った意味になつてくるように思われますね。そして「当後度衆生」「まさに後に衆生を度すべし」。これから私は衆生たちを度します。度すとは、「悟りへと渡しますよ」、こういうことですね。度すべし。従つて、今この四つを合わせたら、

こういう意味になる。「この後は全ての人々を悟りの境地へ渡そう」の意である。インド史料に依りますと、『誕生偈』が動詞の未来形によつて示されていることから、明らかに将来への決意を表現していることがすでに指摘されています。それはそこに挙げてある論文ですね。難しいお名前ですが、阿先生の「釈尊誕生伝説 ― その諸問題の解明」に、「このことからすれば『今昔』の卓見というべきであろう」とあります。

いっぽう、『今昔物語』の示す十方七歩は、合わせてみますと、「無量ノ衆生ノ為ニ上福田トナル」。「上福田トナル」とは、直接の意味は「最高の幸せを齎せる田んぼと成る」ということであつて、この最高の幸せとは当然悟りの境地ですから、従つて「すべての生きとし生けるもののために、悟りに至らしめる拠り所と成ろう」ということでもあります。それから、「生ヲ尽クシテ永ク老死ヲ断ツ最後ノ身ヲ示ス」は「生じてくること、この世の中に輪廻して再び生まれまることが尽きて、永遠に老死を断じて、これが最後の身体を持った姿です」ということになります。「生ヲ尽クシテ永ク老死ヲ断ツ」に「我生胎分盡」を含みこませていると考えられます。次に「諸々ノ生死ヲ渡ル事ヲ示ス」は『大般涅槃經』の「已度有生死」。ここの所だけ違ふんです、実は。『今昔物語』が持ち込んだと思われる『大般涅槃經』の記述と、『今昔物語』は少し違ふんですね。「諸々ノ生死ヲ渡ル」を『大般涅槃經』は「已度有生死」というように書いてあるんですね。これを「諸々ノ有ラシテ生死ヲ渡ス事ヲ示ス」と解すれば、「当後度衆生」に内容的に一致するということになります。しかし「已」という字ですが、これを加味して理解すれば「生死を有することを渡り終えた」ともなつて、「我生胎分盡」の意にもその理解可能であろうか、というように思われます。「衆生ヲ導ク首ト成ル事ヲ示ス」は字義どおり衆生を悟りへと導くもの、つまり「仏」となることを意味しています。次に「種々ノ煩惱ヲ断ジテ仏ト成ル事ヲ示ス」のです。種々の煩惱を断じて、つまり煩惱を滅し尽くす漏盡ですね。これは仏と成ることを意味します。次の「不浄ノ者ノ為ニ穢レザル事ヲ示ス」。この世間

で不浄な者の中にあつても、私はさらにそれに穢されることは無い、ということの意味であります。次、「彼ノ衆生ニ安穩ノ樂ヲ令受ル事ヲ示ス」、これは、衆生たちに悟りという安穩の境地を得させるといふことになります。このように理解しますと、十方七歩と「誕生偈」は以下のように、ある意味、対応関係を持つていふように理解できます。

まず、南七歩は、「当後度衆生」です。資料では『今昔物語』の記述が下です。「無量ノ衆生ノ為メニ上福田ト成ル事」。私は衆生たちを悟りへと導く抛り所となろうということをおっしゃっている。従つて抛り所となるということは、「全ての衆生たちを度しますよ」という意味を持つてることからすると、「当後度衆生」ですね。それから「生ヲ尽クシテ永ク老死ヲ断ツ最後ノ身」。これは「是最末後身」です。「諸々ノ生死ヲ渡ル事ヲ示ス」、これは「我生胎分盡」ですね。「衆生ヲ導ク首ト成ル事ヲ示ス」、これは「当後度衆生」です、内容的に。「種々ノ煩惱ヲ断ジテ仏ト成ル事ヲ示ス」、これは「我已得漏盡」でしょうね。それから「不浄ノ者ノ為ニ穢レザル事」、私はもう煩惱を尽くしてしまつてゐる、清らかな身でありますから、それ以上穢されることは無いというように理解すれば、「我已得漏盡」といふことになりはしないですか。それから下七歩ですが、「当後度衆生」ですね。「諸々の衆生ニ安穩ノ樂ヲ令受ル事ヲ示ス」。これはまさに「この後、衆生たちを救いましょう」でこんなことで、この十方七歩の内容と、「我生胎分盡」以下の内容がある程度連動してゐると理解できるのではないのでしょうか。こういう試みをしてみたわけです。随分と冒険していますが、つまり『今昔物語集』天竺部の編集意図は、ここに示されているものと理解できる。七歩で示されたこれらの内容が、自らの意思でもつてこの人界に生じた菩薩の誓願を示しているものとして理解するならば、経が「我已得漏盡」（私は已に漏盡を得た）とするところを、「種々ノ煩惱ヲ断ジテ仏ト成ル事ヲ示ス」、また「不浄ノ者ノ為ニ穢レザル事ヲ示ス」として、そこに過去のものとせず未來的なもの

として理解しようとした、『今昔物語集』の意図があることがわかると思っています。解脱は修行の結果として得られた境地を示し、それに至る過程の意味を含むことは難しいわけですね。解脱と言ってしまうと、さとり、一つの境地を描いてしまう。それからいくと漏盡というところも、漏を尽くすという一つの動き的なものとして捉えられるとおもいますが、その漏盡をそこに持ち込んだところもその辺に開わりがあるのかなあということです。

以上で『今昔物語集』の中に、こういうふうな私に言わせたら面白い、楽しめる記述がまだまだたくさんありますので、一度こういう冒険を試みようかなと思って、考察したまでのことです。こんなことは、学会に発表するべきようなことでもないです。もともと資料を精査しながら、きちんとした論を立てなければ学会では発表できませんが、今日、皆さんの前で、このように研究を楽しんでいるなあという風にね、ご理解いただけたら結構かと思えます。定年後はこういうことに夢を持ちながら、ぼちぼちとまた進めていこうと思えます。文学というのは恐らく知的なイノベーションであるんだろうと思えます。我々はこれから時代が進んでいく中で、世界がいろいろと変わり、人間の生き様が変わってきますと、我々の知的な、大学を含めて知的な方面でも是非イノベーションとイノベーションってのがまあ必要になるだろう思いますね。新しい考案ですね。新考案、イノベーションってのはそういう意味で受け取って下さい。新しい考え方ですね。それからインベンションというのは「発明」と訳してしまえますが、そうじゃなくて、これも「創造」、クリエイティブな創造性、こういうことが求められていく時代に入ってきているのではないかなあというように思います。文学は大体そういうところを我々に与えてくれますから、従ってそういう目をもって読んでみたらこんなことかなあ、というやり方をしてみたということでございます。以上、ホントに拙い、訳のわからないことをお話ししましたが、最終講義ですから、学会発表と違って講義でございますから、この辺でお許し頂きたいと思えます。ありがとうございます。